

今春1期生を送り出す ネットワーク情報学部

文理融合学部として01年にスタートしたネットワーク情報学部は今春、第1期生を送り出す。同学部では多くの課題が出されるが、それにより自ら考える「問題解決能力」が自然に身につく、スケジュール管理能力も養うことが出来る。

数ある科目の中で特徴的なものが3年次必修の「プロジェクト1」。約10人のメンバーが1年間かけて目的の達成を目指す。テーマ選定から運営まですべて学生が主体的に行う。

「この科目の醍醐味は体験です。授業の枠を越えて自ら動くことによって問題意識を得ることが出来るのです」と学外のコンテストでも好成績を挙げたグループを指導した飯田周作助教。

企業から本学教員に転身した小林隆助教授は「スケジュール管理やメンバーとのコミュニケーションにより、運営の厳しさと同時にシステム開発の楽しさを知ることが出来る」と語る。

成果発表会

12月7日、生田キャンパスで神奈川県情報サービス産業協会（以下、神情協）の後援と川崎市産業振興財団の後援を得て「プロジェクト1」成果発表会が開かれた＝写真。多くの企業人も参加し、会場の9号館5階アトリウムは、さながら企業展示会のような盛り上がり。相互投票により次の3チームが優秀賞を受賞した（順不同）。

【UMLロボットコンテストで優勝しよう】（ニュース専修11月号既報）

【ネットビジネスの企画と情報システムの設計】（インテリア商品のネットビジネス）

【ERPシステムの開発】（短期間で完成度の高いソフトを構築）

— ◇ —



プレゼンと表彰式は1月11日に行われ、坂本實学部長から表彰状が、神情協の矢島和弥理事から「プロジェクト管理は企業でも役立つ。今後も頑張ってもらいたい」と激励の言葉と共に図書券（合わせて総額10万円相当）が授与された＝写真。

コンテンツデザインコース 最終課題発表会

テーマは学内向けサービスの提案



各種コンテンツの企画、立案、設計、制作、管理、広報等をプロデュースする人材を育成しているコンテンツデザインコースでは、2年次の最終課題として仮想の会社による「学内サービスの企画」を制作した。11月には、学内教職員も参加して企画プレゼンテーションを行い、そこで指摘された問題点等をブラッシュアップさせ1月17日の最終

発表会では「落とし物検索サービス」「サークルポータルサイト」等、学生生活に直結する19テーマのデモンストレーションが行われた＝写真。

難関試験に合格 学部長賞も

染谷知臣くん(ネット情報2)

ネットワーク情報学部2年次の染谷知臣くんが、大学生での合格は難しいとされる「情報処理技術者試験テクニカルエンジニア(ネットワーク)※注」に見事合格、1月11日には、学部長表彰も受けた。

中学の頃からインターネットに親しみ、高校生の頃には自宅のパソコンをLANでつないだ経験も。「プログラミングを学びたい」とネットワーク情報学部を選んだ。茨城の自宅から片道2時間半かけて通学している。「この学部は課題が多いので、限られた時間で効率的に学ぶ方法を身につけることができます」

1年次で基本情報技術者試験に合格したが、そこで燃え尽き学習意欲がなくなってしまったという。2年次春に「準備不足のまま」受けたソフトウェア開発技術者試験は「予想どおり」不合格。「時間をかけて準備すれば合格出来たはず」。その悔しさがワンランク上の難関試験突破を目指す原動力となった。

「今までの試験とは違って授業とはまったく別のレベルの試験でした。自分で適した参考書をサイトで探し、知識を問う午前試験とネットワーク技術の応用力を問う午後試験に対応するための学習を考え、合格に結びつけることが出来ました」

合格が最終目標ではなく「『学びながら知識が増えていく楽しさ、知らなかったことが分かる喜び』がチャレンジする理由です」ときっぱりと話してくれた。

FUTURE2004 石崎ゼミ

広告・マーケティングを学ぶ首都圏6大学(専修、上智、成蹊、東京経済、東洋、早稲田)の学生が共同で取り組む大学生意識調査プロジェクト(FUTURE2004)が昨年行われ、11月29日に記者発表会が開催された。今回のテーマは「広告とメディア」。プロジェクトに参加した経営学部の石崎徹ゼミの3年次生3人(篠崎貴司くん、小林鉄平くん、阿部正孝くん)を代表して篠崎くんに体験記を寄せてもらった。(調査結果については<http://www.inter.co.jp/tokyo-ad/pdf/future2004.pdf>で)

「広告とメディア」プロジェクトを終えて

篠崎貴司(経営3)



▲専大参加メンバー。左から小林くん、篠崎くん、阿部くんと石崎助教授(11/29の発表会で)

大学生意識調査プロジェクト(FUTURE2004)は、昨年4月から11月まで実施されました。4月、東京・銀座の(社)東京広告協会が開かれたミーティングから11月のメディアプレゼンテーションまで、夏休み以外のほぼ毎日夜遅くまで話し合い、作業を繰り返しました。

プロジェクトが開始して最初に苦労したのがテーマの決定です。「将来」「就職」「ライフスタイル」……とさまざまな案があがりました。「広告とメディア」に決まったのは5月の半ば。息つく暇もなく調査票作りに取り掛かりました。この段階で大変だったのは、仮説の決定とそれに基づく質問内容の決定です。アンケートといっても「仮説を検証するた

めにはどんな質問をすればいいのか」「問題の順番は？」など、考慮しなければならぬことはたくさんありました。作っては修正を加える作業の繰り返しで調査票が完成したのは7月上旬。すぐに調査時の諸注意のインストラクションを受け大学生1000人への実査を行いました。8月中は分析の下準備などで本格的に分析を開始したのは9月上旬の合宿からでした。合宿では分析の手順だけでなく、タイムマネジメントの重要性和ロジックチャートを用いた論理的思考能力を学ぶことが出来ました。合宿が終わるころには大学間の壁は無くなり、メンバーが一致団結。合宿終了後はひたすら会議を繰り返し、調査報告書の編集作業を進め、11月半ばに完成させることができました。メディアプレゼンテーション直前の1週間は、寝る暇もないほど練習を繰り返しました。結果的に自分たちの調査結果が新聞や雑誌に取り上げられたのを目にした時はうれしかったです。

このプロジェクトに参加し多くの人と接したことで調査に対する知識はもちろんのこと、人間的な面も学ぶことが出来、得るものもたくさんありました。最後になりましたが調査に回答して下さった方々、ご協力ありがとうございました。

さまざまなサポートシステム・奨励制度

専修大学では、意欲ある学生を応援するさまざまなサポートシステム・奨励制度を設けている。学生の秘めた能力にスポットを当てる学生部主催の数々の取り組みの中から「懸賞論文・文芸作品コンクール」文芸作品の部・鳳賞と「専大ベンチャービジネスコンテスト」鳳賞の受賞者に話を聞いた。

文芸作品コンクール

— ゼミでの学びが作品に —

殿水由里子さん(文4)



鳳賞の殿水由里子さん(文4)は、1年次でも佳作に選ばれた実力派。12月に行われた表彰式では審査員の柘植光彦文学部教授に「文章力が素晴らしく、ユニークなヒロインの心象がよく分かる。完成度も高い」と評価された。

普段は星新一や椎名誠のSF作品をよく読むという。受賞作「蠍の住む海」がどのようにして生まれたのか聞いてみた。

「モデルとなる地域があって『子どもが大人の世界を見る』という小さい頃の体験をモチーフに書き始めたのですが、実は書いているうちに主題が変化してきたのです。2年ほど前からあたためていた構想を、就職活動と並行して数日間で一気に書き上げました」

作家である小林恭二文学部教授からは「わくわくするリズム感ある出だしは魅力的だが、終盤失速した感があり惜まれる」との評。「自分でも結末には自信がなかったが以前より文章力がアップしたと評価していただいたことは素直にうれしい」

作家にあこがれて入学した文学部。小野隆ゼミで学ぶうちに「読解する」ということが分かってきた。「読み込むことの大切さを理解したことで、作品も変わってきました」とゼミでの効果を実感している。

書く秘訣は？と尋ねると「誰でも『伝えたいもの』は持っているはず。何にでも興味を持つことが『書く』ことへつながっていくと思う」と教えてくれた。服飾関係の会社に就職が決まっている。小さい頃から絵が好きで、美大への進学も考えたほど。「90歳で絵本作家としてデビューするのが夢」といたずらっ子のように笑った。

ベンチャービジネスコンテスト

— Low-rider bicycleの

生産販売を進める —



小芝 路博くん(商4)

留学先で培った人脈を生かし「スローライフ」の時代にふさわしい自転車の生産、販売を進めている「行動派」だ。

高校時代から「起業」に興味があり、前田和實ゼミで貿易論を学び、アルバイト先は通関業務を行う貿易会社を選んだ。夢の実現に向け着実に準備を重ねていた小芝くんに大きなきっかけを与えてくれたのは前田助教授。勧められて参加したスペインへの「春期留学プログラム」で異文化に触れた経験と語学力の重要性を認識した。翌年休学してカナダに留学。そこでの「出会い」が受賞プランの基となった。意気投合したカナダ、台湾のメンバーでビジネスを立ち上げようと話がまとまり、帰国後もメールで連絡を取り合った。さまざまなプランを考え、エコライフ・スローライフが広がる中、環境に優しく、かつ低価格な「自転車」を企画。台湾のデザイナーに依頼し、生産も台湾で、販売拠点は日本、ニュージーランド、カナダに置くことを決めた。

11月7日に行われたプレゼン大会では試作品を披露し、下北沢や渋谷といった若者が集う街の洋服・雑貨店などに営業をかけ、好感触を得ているという「実践力」が高い評価を得た。

起業のポイントを「出会い、人脈、縁、タイミング」と語り、「留学プログラムやさまざまな講座を活用して夢の実現に近づくことができた」と専大生活を振り返る。

コンテストの賞金(旅行券)で1月に台湾に行き、契約を済ませてきた。いよいよ本格的な生産が始まり、「夢」が花開く日も近い。

ファンドマネージャーグランプリ表彰式



5月から7月まで行われた「ファンドマネージャー専大グランプリ」(優勝・戸塚晃章くん、同優秀賞・池内侯太くん、松本千春さん、田中大輔くん、西村直也くん)と同投資経過分析レポート(優秀賞・松本さん、西村くん)の表彰式が11月30日、生田キャンパスで行われ、それぞれ賞金が手渡された。

多彩な支援 学生相談室



学生相談室にはカウンセラーが常駐し、相談に応じたり情報提供を行っている。教員と

交流を持つ「ティーアワー」や、より良い人間関係の構築を目指す「ワークショップ」なども開催。

11月17日には「自分色発見 パーソナルカラーを見つけよう」が行われた＝写真。

活躍する卒業生

各界で活躍する卒業生を訪ね、学生時代の思い出や当時の活動が卒業後の生き方にどう生かされているのかを聞いてみた。

青年海外協力隊員として

7月からバングラデシュへ

テニスの強化と国際貢献をめざす

北條総子さん(平12文)



テニス部OGの北條総子さん(平12文・リコー)が2度目のチャレンジで青年海外協力隊に選ばれ、7月からバングラデシュへ「テニス強化」部門で派遣される。今、ベンガル語を猛特訓中だという。

東海大相模高から英米文学科に。「異文化コミュニケーション」の授業で、海外の文化・生活・宗教などに興味を持ったという。体育会テニス部では主務を務めた。「テニスが続けられるのは、大学の援助も含めて周囲の支えがあったからこそ。いつかは恩返しを」という思いから、ボランティア休職制度がある「リコー」に入社した。

同社でもテニス部主将として活動し、昨年は神奈川県代表として出場した国体で4位入賞と、仕事とテニスを両立させながら、ボランティア活動にも積極的に関わる。「リコーには誰でも参加できる、社会貢献室という組織があります。そこで耳の不自由な方の生活に役立つテニスボールの再利用を提案し、実現させました。活動は今も続けています」

社会貢献や国際貢献に積極的な同社でも「休職制度」を利用して協力隊に参加する社員は初めてだけに周囲の期待も大きい。

「小さい頃から好きで続けてきたテニスを社会に生かすことができる。これほど幸せなことはありません。生活に慣れたらホームページを開設して、現地の様子を皆さんにご紹介したい」。

途上国への援助を、という呼びかけに大手スポーツメーカーが賛同し、用具を寄付してくれることも決まった。「本当にやりたいことは、勇気を出してことばにすれば、かなうんです」と最後にモットーを教えてくれた。

こどもたちに夢と希望を

北日本児童文学賞・最優秀賞を受賞した



野澤恵美さん(平10法)

北日本新聞社(富山県)主催の第2回北日本児童文学賞最優秀賞に埼玉県在住・野澤恵美さん(平10法)の「天の川をこえて」が応募総数479編の中から選ばれた。

埼玉県の松山女子高から進学。山崎悠基ゼミで会社法を学んだ。小さい頃から詩を書くのが好きだった。「会社員時代、先輩たちと携帯電話に小説を書いて回し読みしていたら『面白い』と評判に。それをきっかけに本格的に書き始めました」。

2年前に初めて書いた童話が、ある創作童話コンクールの優秀賞に選ばれた。そして10作目となる受賞作は、自身の不思議な体験がモチーフ。第2次選考に残った時点で「いい結果が出ると思った」と第1号

の読者である夫の征也さんは、自信がなくて落ち込んでいた恵美さんを励ましてくれた

そうだ。

昨年11月に富山市で行われた表彰式で、選考委員の児童文学者・那須正幹さんに「文章は荒削りだが、ワクワクしながら読ませる構成力が群を抜いていた。子どもの目線に立っている作品を選んだ。これからますます精進を」と激励された。「今まで『努力』をしないで書いていた点を反省しました。基本から『書く』ことを学び、小説にもチャレンジしたい」。

当日、校友会富山県連合事務局の高安明さん(昭48経営)がお祝いに駆けつけてくれたという。「富山県連合会長の大江進様(昭44商=立山町長)から祝電も頂戴しました。専大の卒業生のネットワークを心強く感じました」と振り返る。

実家の陶芸教室で子どもたちに教えることも。「感性の豊かさに驚かされます。日々の小さな出会いや体験を今後の作品に生かしていきたい」と語り、好きなことをやっているうちに「本当にやりたいこと」が見えてきました、とやわらかな笑顔を見せた。

学生時代に培った

チームワークの心で

コーチ・ジャパンのISシニアマネージャー



長谷川由季子さん(旧姓太田昭63文)

ニューヨークのブランドCOACH(コーチ)の日本での販売会社で、ISシニアマネージャーとして活躍。顧客サービスを図るための販売店のオペレーションシステムの構築と管理を担当している。「目には見えませんが、お客様と店、本社をつなぐ役割と言えますね」。入社2年目。ス

タイリッシュで高品質なバッグの人気の躍進を続け、設立4年目で105店舗を展開、日本におけるバッグとアクセサリーの輸入ブランド第2位にランクされているコーチ・ジャパンの「縁の下の力持ち」を担っている。

英米文学科に学んだ学生時代は、フランススキー同好会に所属。「スキーに明け暮れた4年間でした」。アマチュア学生競技スキー大会の最高峰「全国学生岩岳スキー大会」を目指して連日のようにトレーニングを積み、「体育会的雰囲気の中で心身ともに鍛えられました」。

大島良行ゼミ(現名誉教授)ではアメリカの西部開拓史を学んだ。「同期には個性的な学生が多くいて刺激を受けましたね」。

「卒業後は好きなスキーの仕事を」と、ゴールの山本光学に入社。営業担当で7年間勤務して結婚退職。その後、ドイツのアパレル「ヒューゴ・ボス」でIT関連の仕事に取り組むようになった。両社で養った営業能力、卸、小売の各業務に通じ「現場」を大切にするシステム管理、加えて学生時代に培ったチームワークを大切にする心が現在の仕事に生かされている。

コーチ・ジャパンは今後、国内130店舗を目指す。「終電かタクシーでの帰宅」という多忙さで、夫君学さんとはすれ違いの毎日。お2人の共通の趣味、夏はニュージーランド、年末は北海道で楽しんだ競技スキーもしばらくお預け状態だ。

地元の小中高校とも交流

商店街活性化導くアイデアマン

父も専大卒の老舗蕎麦店3代目



清水 康智さん(平8経営)

JR中央線の西荻窪、吉祥寺両駅の間にある商店街「女子大通り商和会」の若手メンバーとして、街の活性化に取り組む。

創業67年の老舗蕎麦店「田中屋」の3代目。学生時代は、奥田和彦ゼミ(現名誉教授)で「出前利用者の分析」をテーマに卒業論文を書き上げた。野球サークル「経営学研究會ドジャース」の代表も務め「先生や先輩、仲間との交流…その一つひとつがかけがえのない思い出で、今の糧になっています」。

卒業後、和風料理店で修行した後、同じく専大OBの父・汎さん(昭40経済)の元に戻り、本格的に同店で働くようになった。と同時に汎さんが会長を務めている商店街活動

にも積極的に。毎年8月の盆踊り大会は街をあげて展開するほか、近くの女子高とタイアップして美術専攻の高校生が考えたアイデアを店作りに取り込むプロジェクトも。同店の「のれん」やはし袋も高校生のデザインを採用している。空き店舗ギャラリーや子供連れに道路で絵を描かせる試み、近くの小学校に「手打ち蕎麦」の出前授業をした時に先生との話で生まれた小、中学生が描いた絵を店頭飾るイベントも実施。文化の香りを強調することで、もともと骨董店の多い商店街のイメージを高めている。もちろん自店での研究も怠らない。週替わりで考案する人気のヘルシー定食で、杉並区の「ヘルシーメニュー推奨店」第1号に。それが縁でNHK人気番組「ためしてガッテン」の調査隊コーナーにも同店はたびたび登場する。モットーは「個性を大切に」。同店近くに住む板坂則子文学部教授も定連だ。「商店街が寂れていると言われて久しいですが、わが商店街は、田中屋さんを中心にとても元気ですよ」。

【ニュース専修2005年2月号6-7面】